連　載

令和新時代 医療への事務的アプローチ

メディカル・データ・ビジョン株式会社

広報室　君塚　靖

第61回

震災後のクラウドファンディング、クロノロジーなどで情報発信

～石川県のけいじゅヘルスケアシステムの取り組み～

石川県七尾市で恵寿総合病院を運営する社会医療法人財団董仙会（神野正博理事長）を中核とする「けいじゅヘルスケアシステム」の情報発信力は、能登半島地震後の対応で真価を発揮しました。クラウドファンディング、クロノロジーなどで積極的かつ、継続的に情報発信を続けています。董仙会常務理事の神野厚美氏の陣頭指揮の下、麻酔科医で企画部長の神野彩氏が積極的な広報を展開しています。

2024年１月１日の能登半島地震でも「医療を止めない」

2024年１月１日午後４時10分、石川県能登半島を襲った能登半島地震（M7.6）は地域の医療機関に甚大な被害をもたらしました。恵寿総合病院には近隣住民約200人が避難場所として集まりました。

けいじゅヘルスケアシステムの30施設も震災の影響を被りました。施設各所が壊れて、ヒビが入ったり、ガラスが割れたりしました。そうした中、神野理事長の「災害でも医療を止めない」という大号令で、発災直後から救急対応を止めず、同日午後６時までには手術も可能になりました。同４日からは来院が困難な患者に電話での処方薬の対応を開始しました。

▲神野彩企画部長（左）と
神野厚美常務理事

▲自衛隊給水（写真：神野正博理事長提供）

図表１　能登半島と恵寿総合病院

作成：メディカル・データ・ビジョン

能登半島地震では、石川県の一部医療機関が断水となったため、透析患者を一時的にほかの地域の医療機関で診なければならない事態となりました。恵寿総合病院は、外来診療や入院のための病棟は免震構造のおかげで被害はありませんでしたが、水道水の供給が止まりました。

病棟などでは装置で井戸水を濾過（ろか）することで、４日から外来や手術を再開できましたが、同院に付設する透析治療施設、恵寿ローレルクリニックには濾過水を送れず、航空自衛隊による１日15トンの給水が受けられるようになる５日まで、透析治療は中止せざるを得ませんでした。血液透析は、週３回病院に通う必要があります。クリニックが休診していた５日間、患者は地震の被害が比較的少なかった金沢市内など、少し離れた病院やクリニックで治療を受けることとなりました。

医療・介護の分野は人に依存する面がほかの業界よりも強いとされます。職員の中には自宅が被災し、避難所から出勤するケースもありました。職員もまた被災者であったのです。同院理事・本部長の進藤浩美氏は震災の日の夕方遅く、院内で転倒して骨折したそうです。筆者は進藤氏と震災後にWeb会議で話す機会があり、その事実を知りました。

同院で稼働しているPHR「カルテコ」を使って、骨折した肩のエックス線検査画像を見せながら、「恥ずかしながら、骨折してしまった」と話していましたが、その時は、自身で転倒した理由は明かしませんでした。

後日聞いたところ、進藤氏は病院に集まった地域住民のための食料を確保しようと、院内のコンビニエンスストアにおにぎりを取りに急いで向かっていて、その際に転倒し、床に肩を強打したとのことでした。まさしく名誉の負傷だったのです。

震災後に復興対策室長を兼任した神野常務理事は、当時を振り返りながらこう語ります。

「震災後、世の中から取り残されてしまうのではないかといった寂寥（せきりょう）感にずっと、さいなまれていたが、全国から集まったメッセージに励まされた。いつか、そのお返しをしたいと思っていた」――このお返しが、３カ月後の「復興の桜プロジェクト」につながります。

クラファン「災害でも医療を止めない」をスタート

恵寿総合病院では震災後の１月５日からクラウドファンディング（クラファン）をスタートしました。クラファンの名称は「災害でも医療を止めない」。支援総額は約1.1億円に到達。それ以上に驚くべきことは、支援金と共に寄せられたコメントと、全国からの応援メッセージが、合わせて約5,000通に上ったことです。

その一部を抜粋すると、「大変な状況の中、地域のためにご尽力されている皆さまに、ささやかですが協力させていただきます」「家族が入院しています。懸命な医療や看護をありがとうございます。発災後からの取り組みの動画も拝見し、応援しています」「皆さまはさぞ、大変な毎日でいらっしゃることと思いますが、どうぞくれぐれも、お体をお大切になさってください。１日もはやく平穏な日常生活に戻られますよう、陰ながら応援しております」――などといった応援メッセージが相次ぎ

図表２　復興の桜プロジェクト

https://www.youtube.com/watch?v=L4BCuNQ_07k

図表３　能登半島地震クロノロジー

https://www.keiju.co.jp/earthquake2024/

ました。

クラファンでは、施設の被災の状況や復興に向けた役職員の取り組みを映像や写真で発信し続けました。神野常務理事は所管する企画部で映像制作に詳しい職員１人を動画制作に専念させました。神野常務理事はかねて、院内広報誌など媒体制作について、「お金をかけない広報」にこだわってきました。外部業者に発注すれば見栄えのいいものができるが、コストが高くなります。

それ以上に外部業者に微妙なニュアンスを伝えたり、デザインの細部について注文したりする時間自体がもったいないと考えていました。それなら、自分たちでつくったほうがいいと判断し、徹底的に内製化してきました。そのかいあって企画部のコンテンツ制作力は格段に向上していました。神野常務理事が映像の企画構成・ディレクションをして、映像担当の職員と二人三脚で毎晩遅くまで制作を続け、クラファンサイトに１日１本動画をアップするという目標を成し遂げました。

院内壁面を桜色でいっぱいに

復興の桜プロジェクトは、恵寿総合病院の正面入口前の病院案内板などが掲示されている白い壁の上段のスペースを使いました。そこには、応援メッセージを桜色の付箋に転記し貼り付け、職員の感謝の言葉も一緒に掲載しました。この様子は、広報誌「恵寿」Vol.121（2024年４月号）で特集しました。YouTube でも閲覧可能です**（図表２）**。

クロノロジーで経験を将来に

けいじゅヘルスケアシステムが、能登半島地震の経験を将来につなげようという強い思いは、クロノロジーに現れています。クロノロジーとは主に、災害対応時に、出来事や収集した情報などを時系列に沿って記録・整理する手法です。このクロノロジーを担当したのが神野企画部長です。けいじゅヘルスケアシステムの30施設の被災・復興状況をこと細かにつづっていきました。発災直後から３カ月間の主要な事象を見出し形式で抽出した内容を、ウェブサイトで公開しています**（図表３）**。

地震発災以降、董仙会は恵寿総合病院内に危機管理対策本部を設営。クロノロジーは危機管理対策本部・介護震災対策会議、施設復旧会議に集まった情報のほか、非常事態報告を時系列・地域別に記載していきました。

神野企画部長は、「震災の大きな被害は能登半島北部に偏っていた。30施設ごとに共通した点がある一方で、施設独自の被害があるなど違いがあった。震災から２年を経過するが、クロノロジーは今も書き続けている。クロノロジーを読んで、ほかの病院から“生きた実例”として詳細を聞きたいという問い合わせが来ている」と言います。

図表４　神野正博理事長のブログ

「神野正博のよもやま話
－エキサイトブログ」
https://keijumed.exblog.jp/

出前講座など積極的に展開

神野企画部長は異色の経歴を持ちます。映画・テレビ・芸術学部のある米国カリフォルニア州立大学フラトン校に在籍後、日本国内の医学部に入学し、医師になりました。

その時に学んだ映画制作などの知識や技法を病院広報の領域で存分に生かしています。広報誌「恵寿」に掲載する医学・医療関連のページはまず神野企画部長が医師の視点でプロット（筋書きや構想）をつくり、各診療科の医師と相談しながら仕上げています。

また地域住民との交流の場となる出前講座や市民公開講座については、「これまで依頼があったら引き受けるといった受け身の姿勢だったが、積極的に地域に提案している」（神野常務理事）ということです。がんや認知症などの疾患啓発がメインです。出張講座で地域に出向くのは医師だけではありません。事務職の出番もあります。最近ではマイナ保険証を使った医療の受け方などの講座も提供しています。

理事長の取り組みが実を結んだ

けいじゅヘルスケアシステムの広報力は、一朝一夕で蓄えられたものではありません。全日本病院協会長である神野正博理事長の長年にわたる情報発信への絶え間ない努力のたまものです（**図表４**）。

病院関係者で、このブログの存在を知らない人はいないかもしれません。政府や厚生労働省の検討会のメンバーとして、どのような議論が交わされたかや、議論の推移のほか、見通しなどを分かりやすく解説しています。

神野常務理事は「石川県七尾市以外の全国地域への情報発信は、このブログが大きな役割を担っている」と話します。

また2020年４月に董仙会の理事長補佐に就任した消化器内科医の神野正隆氏の情報発信における存在感も次第に大きくなっています。特に、恵寿総合病院の病院DX（デジタルトランスフォーメーション）についての情報発信が、ほかの病院関係者にとって刺激になっていることは間違いありません。Ⓜ